The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芭蕉の自然随順について
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1952, 5, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

芭蕉の自然随順について

小島吉雄

わたくしは曾て九州大学文学部内の九州文学会発行にかかる雑誌「文学研究」第三十九輯に「芭蕉の荒海や の句について」といふ文章を発表し、その中で、芭蕉の「荒海や」の句を契機として彼の作品の性格とその制作意識とを検討したのであるが、その結論として、わたくしは次のやうなことを述べたのであった。

「芭蕉は、客観的存在としての自然に決して忠実だったとは言へない。時には、自己の主観を以て自然を色づけしてゐる。従って、自己を空しうして対象たる自然に素直に没入してゐるといふことは出来ない。絶えず感傷的な色眼鏡で自然を観てゐるとさへ言へるかも知れない。もし、芭蕉が私意をはなれて自然に没入してゐるといふ風に感ぜられるならば、それは芭蕉芸術の魔術にかかった享受者側の錯覚でなければならぬ。

ところが、芭蕉の言葉として、三冊子に

松のことは松にならへ、竹のことは竹に習へ

といふことがしるし伝へられてゐる。また、笈の小文には、彼自身が、

造化にしたがひ、造化にかへれ

と書きしるしてゐる。そして、それらの言葉は、私意をはなれて自然に随順することを意味してゐるのだと従来は解せられ来ってゐる。すると、このことと今までわたくしの述べ来ったこととは、矛盾衝突することとなる。然らば、この矛盾衝突を如何様に解決すべきであるか。ここに於て、わたくしは更に、芭蕉の自然随順といふことについて改めて考へ直してみる必要を感ずるのである。今あげた三冊子や笈の小文の言葉も、果して従来解釈せられ来ったとほりに解して差支へないのであらうか。これについては稿を改めて論じてみようと思ふ。」

と。すなはち、今回は、この芭蕉の自然随順といふことについて考へてみようと思ふのである。

およそ、文学であり芸術である以上、芭蕉が自己の作品に於て自然や事実を理想化するといふことは当然のことであって、自然に対して忠実でなかったとて少しも不思議ではないのであるが、問題は、この自然の理想化の事実が「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」といったことと、どう関係づけらるべきかといふ点にあるのである。

芭蕉が自然に対して忠実でなかったといふことは、その作品の上にあとづけられる厳然たる事実である。従って、芭蕉の自然随順といふことは、文字どほりにこれを受け取るわけにゆかない。その作品を通じて知り得る限りでは、自然に対して芭蕉一流の一つの解釈

があったのである。その解釈にもとづいて、自然の諸相を眺め、自己の感情を動かし、そしてそれを諷詠したのである。ところで、芭蕉一流の解釈とは何か。それは、自然を無常と観じ、不如意とあきらめることである。無常なるが故にはかなく、はかなきが故にあはれに美しく、そして限りなき愛着を覚えさせられるのである。また、不如意なるが故にわびしく、わびしきが故にかなしく心細く、そして詩魂をゆすぶられるのである。われわれは、そのやうな芭蕉一流の自然観が成立するためには、芭蕉の自然への忠実な観察と純粋な躰験とが基礎になってゐたかも知れないといふことを一往は考へることが出来る。言ひかへると、自然への全面的随順の中から、かういふ自然観が成熟して来たのだといふ考へも可能である。けれども、その作品を通じて見た芭蕉は、自然観察に必ずしも忠実でない。たとへば、「水光接天白露横江」といふ漢詩句から、「ほととぎす声横たふや水の上」といふ句を構成して来てゐる。また、自然の風景を叙するに当っては、きまったやうに洞庭西湖にたとへ、漢詩句を引用してその美を概説するのである。洞庭西湖は芭蕉未見の風物である。芭蕉は美景の象徴としてこれを引用するに過ぎない。これを以て眼前の風景描写に忠実なるものといふことも出来ないし、純粋な躰験が基礎になってゐるとも言へない。従って、かういふ作句作文の例から考へれば、自然観察に忠実であったといふ証拠も見出だせないし、自然への深い洞察といふやうな点も疑はしくなって来るのであり、芭蕉の対自然態度には先入主観による一定の心構へがあったといふ風に考へられるのである。芭蕉の伝記は芭蕉に仏教的教養のあったことを物語ってゐる。自然を無常と観ずる自然観は仏教的世界観に通じてゐる。そして、また、かういふ仏教的世界観は、わが国民の伝統的感情に融合しきってをり、古来の文人の生活感情となってゐる。芭蕉は、仏教的世界観に影響せられ、古来の文人の伝統的感情に生きようとしたのではないか。笈の小文に述べられたのを見ても、芭蕉は西行や宗祇に私淑し、西行や宗祇のやうな風雅の世界に身を置くことを理想としてゐたことは明らかである。西行や宗祇のやうな風雅の世界に身をおくといふことは、言ひかへれば、西行や宗祇のやうな世界観に生き、西行や宗祇のやうな自然の受け取り方をしようといふことである。西行や宗祇は仏教的世界観に生きた人々である。従って、その自然観にも、対自然態度にも仏教的色彩が濃く、自然を仏教的無常観で捉へ、自然の美をはかなきものと眺めた人々である。自然の美をはかなきものと見るが故に、これに限りなき愛着を寄せた人々である。芭蕉もまた同様であった。蓋し、宗祇や西行の対自然態度や生き方が、芭蕉一流の自然観や世界観の確立に役立ってゐるのであらう。と、かういふ風に考へてくると、自己を空しうして自然の中に没入させた躰験から、芭蕉のやうな自然観や対自然態度が生まれて来たのではないやうである。すると、芭蕉の創作態度には、自己を空しうして自然に随順するといふ点は、どこにも見出だせず、ただ伝統的感情と仏教的世界観とに影響せられた自然観に立脚して、その自然観によって自然に一つの解釈を与へてゐるのが、彼の作品だといふことになる。そして、この事実は、尠くともその作品の上では動かせない。ところが、「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」といふ言葉を彼が言ったといふのである。そこで、その作品を通じてみた彼の自然に対する心構へと、この言葉との関係を矛盾なく理解するためには、勢ひ、この彼の言葉を単なる自然随順の意味に解釈しないやうにす

るよりほかはない。では、どうこれを解釈すべきであるか。

思ふに、芭蕉のこの言葉を「私意をはなれよ」といふことだと解釈したのは土芳である。土芳は、これを解説して、「習へといふは、物に入りてその微の顕はれて情感ずるや句となる所なり」と述べてゐる。これを現代流に解釈して、「対象に虚心に自己を没入せしめて、その対象から受けた感情の動きが、即ち句となる」と理解するならば、まさしく此れは写実主義の立場であり、また自然随順の文字どほりの意味にもなるのである。しかし、土芳は果してこのやうな意味でこの文章を綴ってゐるのかどうか。もしまた、土芳がこのやうな意味でこの文を書いたのであるとしても、これは土芳の言葉であって、芭蕉の言った言葉ではない。従って、「松のことは松に習へ」といふ語は、土芳の言ってゐるやうなつもりで、芭蕉が言ったのかどうかは明らかでない。だから、この句に土芳の言ってゐるのと違った解釈を施すことも可能である。わたくしは、恐らく、芭蕉の真意は、自己を空しうして自然に没入せよといふことを此の句で言はうとしたのではなからうと考へる。「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」といふのは、松には松本来の性情があり、竹には竹本来の性情がある。その本来の性情に背いた句作りをしてはいけない、といふことを言ったものだと、わたくしは考へたいのである。つまり、松や竹の本性に背反した作意を排斥するのである。

元来、連歌の方に、本意といふ言葉がある。本意といふのは、物そのものが具備してゐる本質的な属性をいふのであって、たとへば、春雨には春雨らしい静かで暖かい、物の芽を育くむやうな情味といふものが、本来の性情として附属してゐるものであるが、それを本意といふのである。春の雨は時には夕立のやうに降ることもあらうし、実感として寒々とした降り方をすることもあらう。それでも、その春雨を夕立のやうなものとして句によむことやさむざむしいものとして句に詠ずることは、本意にはずれたものとして、これを嫌ふのであって、あくまでその本意を生かした作意をしなければならないといふのである。季語に象徴の役割りを果させようとする小詩形文学にあっては、かういふ作法を説くことは、当然あり得ることなのであって、本意といふことを、あらはに説きはじめたのは、紹巴前後からであるが、その精神は古くからあるのであり、連歌以前の和歌の世界にもさういふ考へ方は存在してゐたのである。去来抄にも、去来の言葉として、「俳諧は新意を専とすといへども、物の本情を違ふべからず」と出てゐる。また、土芳のくろさうしには、春雨は小止みなく、いつまでも降りつづくやうにし、五月雨は晴れ間のないやうに言ふものであると述べてゐるのも、春雨の本意や五月雨の本意に留意すべきを言ってゐるのであらう。蕉門に於ても本意を生かした作意といふものを重んじた様子がこれらの文から察せられる。

また、これも去来抄にある文であるが、芭蕉の「行く春を近江の人とをしみけり」といふ句を尚白が非難して、「行く春」は「行く歳」でもよいし、「近江」は「丹波」としても差支へない、所謂動く句であると言ったのに、去来は尚白の難は当らず、「行く春」と「近江」とは動かせない。湖水朦朧たるところが春を惜しむ契機となってゐると述べた。そして、芭蕉は去来の説に賛成して「共に風雅を語るべきもの」だとほめたといふのである。わたくしは、この話のうちにも、芭蕉一門が連歌的本意を作句の主眼にしてゐることを看取し得ると思ふ。即ち、尚白が、近江は丹波としてもよく、行

く春は行く歳でもよいと言ったのは、近江は行く春の本意を表現し得てゐないといふことを指摘してゐるのであり、去来は近江は行く春の本意を必然的に生かし得てゐるといふのである。尤も、去来は、そのあとで、「行く歳近江にゐ給はば、いかでかこの感ましまさん、行く春丹波にゐまさば、本よりこの情うかぶまじ」と言ってゐるし、また旅寝論の中でも、「葛の葉の表見せけり今朝の霜」の句についての論に「景情に応ぜざらんには聊か詠じ給はじ。先師の、行く春を近江の人とをしみけりと侍るがごとく、其の心をしらざる人は却って行く春は行くとしにもふるべく、近江は丹波にもかはるべしと難じき。先師の葛の葉の表も此の心也。葛の葉の表みるべき風情なからんには、ここを吟じ給はじ。」（岩波文庫本による）と述べてゐるから、本意のほかに、躰験とか実感とかをいたはり重んずるといふことがあったのである。それで見ると、蕉門は本意をのみ重視してゐるのでないといふことになるけれども、やはりさうではない。さきの去来抄の文の続きに、「先師曰く、しかり、古人も此の国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるものを」と記してゐるから、躰験はこの場合作句の一契機となってゐるかも知れないが、やはり、作為の主眼ではない。もし、古人がこの国に於て都に劣らぬほどに春を愛した事実がないならば、たとへ近江で春を惜しんだことが事実であっても、芭蕉は近江とは言はなかったであらう。またもし、古人がこの地で行く歳を惜しんだのであったら、たとへそれが事実と違ってゐても、行く春の代りに行く歳を置いたかも知れない。古人もこの国に云々の芭蕉の言葉は、はっきりと此のことを示唆してをり、また、再案に於て初案の季を転換したり場所を変更したりすることは、彼の句作過程に於ける常套であった。つまり、この句が形成せられる過程に於ては、「古人もこの国に春を愛することをさをさ都に劣らな」かった点が大切なのである。「古人もこの国に春を愛した」といふことは、近江の国の本情が行く春にマッチしてゐるといふことを物語るものであり、近江の国が行く春の本意を生かすに ふさはしいといふことを意味してゐる。言ひかへれば、行く春の本意は惜しむべきものであり、近江は春を惜しむにふさはしい本情を具備してゐるのである。芭蕉が近江で行く春を惜しんだことは、事実であった。この事実が、行く春の本意とこの場合は一致したのである。但し、「荒海や佐渡に横たふ天の川」の場合は、天の川が事実は佐渡に横たはらないのであるから、これは、事実が天の川の本意と一致しなかったのである。だから、芭蕉はその本意に適合させるために、事実に背いて、天の川を荒海を越えて佐渡に横たはらせたのである。蓋し、芭蕉もまた本意に則って句を作ってゐるといふべきであらう。春を近江で惜しむといふは、土芳の所謂物そのものより自然に出づる情である。物そのものから出る情でなければ、すぐれた句にならない。天の川の佐渡に横たはるのもまた、天の川その物より出づる情である。物その物より出づる情を見出だし感得することが詩人として最もの肝要事である。物そのものより出づる情は、すなはち連歌でいふところの本意である。芭蕉は対象の中にその本意を見出ださうと努めたのである。だから、この立場でいへば、本意に背反した作意がすなはち私意でなければならない。

ところで、かういふ風に物の本情を見出だし、これを感得するためには、それに応じ得るだけの心の訓練が当然要請せられなければならない。芭蕉はそれを風雅の誠をせめるといふ言葉で言ひあらはしてゐる。風雅の誠をせめるといふのは、笈の小文の冒頭文から考へると、努めて造化にしたがひ造化にかへるといふことのやうであ

る。「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。」といひ、更に「見るところ花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獣に類す」とも言ってをるから、「造化にしたがひ造化にかへる」といふことは、具体的にいへば、心身ともに自然の美の中に没入するやうに心がけるといふことであらう。これは、また自然随順といふ言葉で呼んでも差支へなささうだ。しかし、ここに注意すべきことは、連歌でいふところの本意の実体は、伝統的先入主観を以て固定化せられ観念化せられてゐるものであるといふことである。芭蕉には、連歌的な物の考へ方が大きく作用してゐるといふことは、いろいろの点から証明せられるし、また一般にさう信じられてもゐる。だから、連歌に於ける本意の観念も芭蕉の場合に生きてゐるといふことが言へないであらうか。すなはち、芭蕉の場合の本意、言ひかへれば物そのものより出づる情にも、観念化せられ、先入主観化せられた点があるのではないか。これが、結局芭蕉の作品をして、事実に忠実ならしめない所以なのではないか。

また、かういふ事がある。すなはち、「あかさうし」に、

「内をつねにせめて物に応ずれば、その心のいろ句となる。内をつねにせめざるものは、ならざる故に私意にかけてするなり。」

といふ。これは、物そのものの中に没我的に随順せよといふことではない。主体は自己の内心にあるのである。この言葉は、土芳の言葉なのか、芭蕉自身の言なのか、文脈の上では、はっきりしないのであるが、いづれにしても、芭蕉の自然随順は決して自己を空しうして自然に没入することを意味するのでないことを、この一節は物語ってゐる。

また、同じく「あかさうし」には、芭蕉の言葉として、「乾坤の変は風雅のたね也といへり」といふことが出てゐる。「乾坤の変」といふのは、天地自然の動いてゐるものをいふのである。飛花落葉の如きものは、すなはち変である。これに反して、静なるものは不変である。変動するものが俳諧の材料であるといふことは、自然を無常流転の相に於て認識せむとする世界観に通じてゐる。また、「くろさうし」の中に、

「又ある旅行の時、門人二三子伴ひ出でられしに、難波のすこしこなたより駕おりて、雨の薦に身をなして入り申さるるとなり。その後、此の事をとへば、かかる都の地にては、乞食行脚の身を忘れて成がたしとなり。」

といふ一節がある。これを以て、芭蕉の風雅の誠をせめる具体的な一例とすることが出来る。すなはち、造化にしたがひ、造化にかへるべきを強調する芭蕉が、なぜこのやうな心構へをしなければならなかったのであるか。芭蕉の自然随順といふことは、決して没我的でなかった一例である。芭蕉は、自然もしくは造化といふものを、連歌にいふところの本意的に認識してゐたのである。語をかへて言へば、自然の本意は、無常なものであり、不如意なものであり、あはれにも侘びしいものであると考へ、そして、さういふ自然の本意に私意をすてて随順しようとしたのである。彼の所謂風雅の誠をせめるといふのは、さういふ自然の本意の中に心身をはふらかして、その本意をわが心情に反映せしめるやうに絶えず勤めることであった。すなはち、このやうに考へることによって、彼の言葉が矛盾なく解釈せられると思ふのである。

これを要するに、本論に於ては所謂芭蕉の自然随順の性格を考へ、そして、それは制限せられるところのある随順の仕方であったといふことを、わたくしは言ひたいのである。だから、随順を単純に文字どほりに受け取ることは、危険である。

—大阪大学教授—